

カクマ難民キャンプでの大学教育

下川雅嗣

下川ゼミでは、卒業式の直前に、毎年卒論・ゼミ論要旨集や全文を載せた CD-ROM の作成を学生主体でやっている。しかしながら、このために毎年なんらかの巻頭言を書けと言われ、文書を書くのが苦手な私はこれが一苦勞である。今年も卒業式の直前に海外逃亡を行っていた。今までの私の専門とは違うのだが、アフリカ・ケニアのカクマ難民キャンプに行ってきた。例年のようにそこでの話を少し紹介したいと思う。

ケニアまた東アフリカ全体の難民の状況、カクマキャンプの報告等は別な機会に譲るとして、ここではカクマキャンプでの大学教育についてのみ紹介する。なんと遠距離学習 (Distance Learning) とって、南アフリカ大学の学位がカクマキャンプの中で手に入るのである。そしてこの学生とディスカッションをしながら、私のゼミ生・上智の学生のことに思いを馳せ、思い浮かんだことを分かち合ってみたいのである。



難民キャンプと言ってもイメージのわからない人もいるだろうから、簡単に紹介しておく。カクマ難民キャンプは、1992年に設立された。ケニアの首都ナイロビから北西約900Km、スーダン国境にあるロキチョキオより南に約80Km、スーダンとの国境からは約135Kmに位置する。同キャンプの広さは南北約13Km、東西約1Kmである。現在、同キャンプに滞

在している難民は約9万人で、スーダン難民が最も多く約75000人、その他ブルンジ、コンゴ民主共和国、エチオピア、ソマリア、ウガンダ及びルワンダ出身の難民が滞在している。

私は、ナイロビからロキチョキオまで飛行機で飛び、ロキチョキオからは車で約2時間でカクマだった。ロキチョキオからカクマまでは、私たちの車とUN(国連)の車の2台で移動したのだが、それには警察のエスコートつきだった。警察のエスコートがないと、襲撃されると言う。ナイロビは20度前後で過ごしやすいのだが、カクマは異様に暑くて大変な場所だった。日中は40度まで気温があがり、木陰に吹き込む風が熱く感じた。夜も36度くらいで寝苦しい。なお、私たちの泊まったところはカクマキャンプ内ではなく、隣接するNGOやUNの宿営地である(カクマキャンプ内は危険ということで、UNやNGOスタッフは夜6時以降は立ち入り禁止)。そこには簡易宿舎が建てられており、そこでさえ生活環境はかなり厳しいので、キャンプ内のテントや掘っ立て小屋での生活はどれほど厳しいのだろうか。私は行った翌日の日中に日射病のようになり夕方から嘔吐を繰り返し、

夜通しうなっていた（なお、私はスラムの水等を飲んでもお腹はいつも大丈夫なのだが、体温調節はあまり得意でなくよく日射病のようになる。ただこれはいつものことで夜寝れば基本的に大丈夫）。また、カクマキャンプに来ている人々は、ほとんどが壮絶な歴史を有しており、その中ではトラウマからのリハビリテーションなどが非常に重要な仕事となっている。そして、上述したような多様な文化背景を有した人々、さらには同じ村で殺しあった人々の両方がキャンプに居ることもあり、そこでの生活の厳しさは行って見なければわからない。と同時に、キャンプ内では、平和教育（Peace Education）の試みも様々に行われており、トラウマからのリハビリテーションと同時にされる平和教育は、将来のアフリカ、そしてアフリカのみならず、全世界の平和構築のための先駆的な場であり、新たな光を放っている場とも言えよう。



さて、本題のカクマキャンプ内の大学教育・遠距離学習(Distance Learning)に話を移そう。カクマキャンプ内で、将来母国に戻ったときに、新しい国家、社会建設を担う若者のための大学教育が行われている。これは、カクマキャンプ内でプライマリ・スクール、セカンダリー・スクールまではあるのだが大学はなく、難民たちが「国連には国連大学があるのだから、私たちも大学教育を受けたい」と国連（UNHCR）に要望を出した結果、国連はそれに応えようとしな



かったが、代わりに JRS（Jesuit Refugee Service）が仲介し、南アフリカ大学（Public University of South Africa）の協力により、1998年に実現した。その結果、カクマキャンプにいながら、単位と学位がとれるのである。社会科学系の学科は、学生の希望によってほぼすべて履修できる。当然のことながら、入学試験（だいたい受験生が 300 名く

らいで毎年の合格者は 10 名程度）もある。合格したものは、毎学期、履修科目の教材が送られてきて、それを基本的には自習し、学期末試験に、実際に南アフリカ大学で行われている同じ試験を受けて、それをパスすれば単位がもらえるという仕組みである。私たちは、そのほぼ全員とディスカッションの時間を持ったが、学生は約 30 名、エチオピアからの難民が一番多く（エチオピアでは、大学生が政権の批判を強くやったので、現政府にとっては彼らが、最初の殺戮の対象にされていたため、元々大学生であった人が多数逃げ、カク

マキャンプにいる)、次に多いのがスーダン、そしてルワンダ、ソマリア、ブルンジの難民もいた(なお30名のうち女性は3人)。私が訪問したときはもう昼の暑い時間で、それにもかかわらず、熱風のふく木陰(教室ではない)で、上半身裸で、各自が自習をしていた。とにかく、この嘔吐しそうな厳しい状況の中で、しかも教員もいないのに、皆真剣に自習をしている状況は感服に値するもので、上智の学生諸君にもその光景を見て、今自分たちの置かれている状況と比べて欲しいと思う次第である。

彼らとのディスカッションの中で、彼らがなぜ、そして何をこの大学で勉強しているのか等を聞いた。彼らの所属している学科としては、コミュニティ開発学科、社会学科、公共政策科等が多かった。そして、彼らがここで勉強している動機は、ほとんどが、「将来国に戻ったときに、新しい社会をつくる必要がある。そのためには、専門的な知識や国際関係、経済構造等を理解していないと自分たちの国を発展させていくことができない」と言ったものであった。彼らの中には、自分だけが知識や知恵を吸収することによって、豊かな生活をするとか、成功するといった動機というよりも、将来の自分たちの社会の発展というものを夢みて、そのために貢献したいと真剣に望んでいる様子が伝わってきた。このディスカッションをしながら、私は自分の大学の学生たちは、何のために勉強しているのだろうか、その真の動機はなんだろうかと思い巡らしていた。ディスカッションの中で、日本の過去の教育の話、そして今の現状、また難民キャンプ内での教育の目的等を話し合ったのだが、だんだんと明らかになってきたのは、教育・知識を取得することは重要であるが、もっと重要なのは、その教育・知識を何のために使うのかが、さらにもっと重要であるということである。彼らは、受けた教育を将来の社会づくりのため、また他者のために使うとまっすぐに考えていた。また日本においても、明治時代において大学教育を受けていた人の多くは、新たな社会づくりのために、受けた教育を使っていたような人が多かったように思う。しかしながら、今の大学生はどうであろうか。日本の社会は、多くの人々が、教育の分野に限らず社会全体において個人主義的になり、自分が社会で生き延びること、社会の中でのステータスを獲得することが中心的な価値観になりつつあるように思う。また、大学自体も、その大学が生き延びること、社会の中でのステータスを獲得することが中心的な課題となり、文部科学省の大学教育への考え方も、日本社会の国際競争力を向上させること、すなわち、日本が生き延びること、国際社会の中でのステータスを獲得することが中心的な課題になっているのではないだろうか。このような大きな流れの中で、カクマキャンプ内の大学生との話は、教育の原点に私たちを再び戻してくれるような気がする。なお、皆は意識していないかもしれないが、上智大学の教育理念の中には、上智の教育は「他者のための教育」であると記されている。カクマの大学生はこれを実践している。私たちはどうであろうか。今年卒業する人々が上智大学で学んだことを社会をよりよくするために使ってくれること、そしてまだ大学生活の残っているゼミ生は、残りの教育を、そのような動機で学んでいくことを願うばかりである。